

漢化作用、すなわち征服王朝としてもっとも注意しなければならない漢化現象を促進し滅亡の因としてしまった。それを見た金は、一方では仏教を客観的に眺め行政的に扱い、他方、個人としては尊宗し、保護を加えるという二面的な扱いをしたという。そこには明白に遼に対する批判と新らしい工夫がなされているといえよう。さらにそれを受けた元、すくなくともその建国者で世祖は、金の方式に則しつつも、自らの信仰は漢人仏教とは異質なラマ教に求め、中国仏教に対しては統治者としての配慮を怠らなかつたのである。こうした仏教に対する処し方から見ても征服王朝の波は次々に受けつけられさらに高められていったことを知ることができよう。(なお、本論の詳細は拙稿「元朝における政治と仏教」(『大谷大学研究年報』第二十七集所収)第一章を参照されたい)

(丁)

志向するところはもとより単なる古文の模倣にあつたのではない。文学を通して道を求める、道を明らかにしようとしたところに深意があるのであって、古来多くの人々がこの点に注目してきたのである。韓愈は「然ると雖も愈の古文を為るは、豈に獨り其の句讀の今に類せざる者を取るのみならんや。古人を思ひて見るを得ず。古道を学べば則ち其の辞に兼ね通せんと欲す。其の辞に通ずる者は、本より古道に志す者なり。」(韓昌黎集卷三三 題歐陽生袁辭後)といい、柳宗元は「始め吾れ幼にして且つ少きとき、文章を為るに辞を以て工と為す。長ずるに及んで、乃ち文は以て道を明かすを知れり。是れ固に苟しくも炳炳烺烺たるを為して、采色を務め聲音に夸りて、以て能と為ざるなり。」(柳河東集卷三四 答韋中立論師道書)と述べている。

## 唐代古文運動の一背景

本學講師 河 内 昭 円

韓愈と柳宗元の二家は、中唐におこった古文運動の大家としてつとよく知られている。彼等はとともに、修辞に専心して形式に拘泥する六朝の駢文を斥け、実用達意の西漢以前の文章、すなわち古文への回帰を提唱したのであった。その主張と作品は、そのち今世紀の初頭に至るまで文章家の規範となつたが、韓・柳が

この卓越した文学觀のもとに、当時多くの文人が彼等を慕つて集まつた。韓愈は朋党的禍を懼れて師弟の関係を忌避する当時の風潮に敢然と立ち向い、「師の説」を発表してすんで師の必要性を説いた。かくして彼の門下には「唐書」の韓愈伝に附伝される孟郊・賈島・劉叉・張籍・皇甫湜はじめ、李翹・李漢などの多數の英俊が輩出した。柳宗元は「往に京都に在りて、後學の士の僕の門に到るもの、日に或は數十人なり。」(柳河東集卷三四、報袁君陳秀才避師名書)と長安時代の様子を述べているものの、生涯の途中で朝廷に罪を得てのち不遇に終つたこととも相俟つて、韓愈ほどには積極的な指導性を發揮しなかつた。しかし左遷された住地にも彼を欽慕する若者の跡が絶えなかつた。「柳河東集」にはそいつた人たちに与えた詩文が多く収録されている。

ところで、韓・柳によるこのような古文への回帰を目指す運動が、突如としておこったものではないことは文学史上これまた周知の事実である。唐代における復古の思潮は、早くは六朝の遺風が席卷する初唐にすでに胎動していた。これを詩についていえば、陳子昂が齊・梁の詩の采麗に陥入るを厭い、詩経の風雅を慕つたことはとみに名高い。盛唐には李白が「古風」を制し、次いで中唐にかけては元結・顏真卿・祝皎然などが現われて六朝の詩を鋭く批判した。希求するところは、風雅・雅正・雅道といったことばで表現される「詩経」の精神への復帰である。中唐になつて、そうした精神を実践にうつしたのは韓・柳の古文運動にややおくれるが、白居易・元稹が「新樂府」を制して詩道の再興に心血をそいだこともまたよく知られている。

散文においては、初唐に富嘉謨・吳少微があり、六朝の駢文を斥けて、經典をもつて根本となす一体を開いた。富吳体と称され時人はこれを欽慕し、文体は一変したといわれる。盛唐から中唐にかけては蕭穎士・李華・獨孤及らが現われ、次いで中唐には梁肅・柳冕・呂溫らが輩出した。彼等はおしなべて遊戯的で内容の乏しい文章を排斥し、古文への回帰を提唱した人たちであった。

韓・柳と劉禹錫らはこの人々に次ぐ文人である。韓・柳の古文運動は、まずこのような復古の大きな思潮の一つの極点として位置づけられるが、そのより直接的な背景がきわめて集団的で、しかも系統だった人脈をもつて形成している点に注目せられる。初期のそれも実体が必ずしも明らかでない富嘉謨・吳少微はとも

かく、蕭穎士以下韓・柳及びその友人門下に至るまでの文人たちは、時代と指導者を少しづつ移行しながらも、一大古文家集団を構成しているのである。「其の道の未だし者は、其の文難なり。其の才浅き者は、其の意煩なり。」(文苑英華卷六一〇)為陳正卿進続尚書表)と道を問題にした蕭穎士は、「唐書」卷二〇二の本伝によれば、尹徵・王恒・盧異・盧士式・賈邕・趙匡・閻士和・柳并といった人々が彼に弟子の礼を執り、蕭夫子と号したという。彼はまた後進を指引することをもつて任となし、李陽・李幼卿・皇甫冉・陸渭ら數十人が蕭穎士の知遇を得て時に名士となつた。その友とするところには顏真卿・柳芳・陸搘・李華・邵軫・趙驛らがあり、なかでも「有徳の文は信なり。無徳の文は許なり。」(文苑英華卷七〇一 贈禮部尚書孝公崔漪集序)と徳を問題にした李華は、蕭穎士と名聲をひとしくし、蕭季と並称された。その李華もまた士人を推奨することを好み、「唐書」卷二〇三の李華伝によれば、獨孤及・韓雲卿・韓会・李紓・柳識・崔祐甫・皇甫冉・謝良弼・朱巨川らはために後に執政の顯官となり得た。

獨孤及は梁肅がしたためた「行狀」(文苑英華卷九七二)によれば、李華・蘇源明の二者が彼を「詞宗」と推称したことによつて、たゞまち天下に名を振つたとある。その獨孤及の門下に梁肅が出で、さらに梁肅の門下から呂溫が出現した。集団的なこれら一連の人々が、啖助・趙匡・陸淳などの新経学派、および荆溪湛然を中心とする天台教学との関係においても、注目すべき関連性のあることが神田喜一郎博士によつて指摘されている(『梁肅年譜』東方学会創立二十五周年記念東方学論集)。

呂温は柳宗元・劉禹錫らと共に、順宗朝に突如政権を握った王叔文が率いる革新的な政治集団に参加して活躍した。彼等を同志として繋いだ絆は、文学観の共鳴が重要な要素を構成していたと思われる。呂温の文集には劉禹錫が序文を書いており、啖助に就いて新らしい春秋の学問を修めた陸淳と、呂温・柳宗元がともに関係のあったことについては、また神田博士に指摘がある。

韓愈と柳宗元が深い交わりを持つていたことは、いまさらいうまでもない。彼等は進士及第前から任官する時期にかけて、官界での飛躍を期しながら、劉禹錫を交えて共々古文を研磨した間柄であった。劉禹錫の「相國韋公集序」(文苑英華卷七〇五)には、「(李)翹、昔韓吏部退之と文章の盟主と為る。同時の倫輩には、柳儀曹宗元・劉賓客夢得あり」とある。柳宗元・劉禹錫が

王叔文に荷担してよりのちは、韓愈とは官途を異にし、さらにまた仏教を受容する態度にも大きな亀裂を生じたが、彼等相互の古文を学び実践する者としての連帯は太く強いものがあった。柳宗元が没すると韓愈が祭文と墓誌銘を作り、劉禹錫も祭文二首と祭文の代作一首、さらに文集の序文を制した。韓愈が没すると劉禹錫がその祭文を書いている。

柳宗元は貞元九年(七九三)二十一歳のとき、進士及第後間もなく父親柳鎮を失なつたが、のちに撰文した先君の神道表の碑陰に「先君石表陰先友記」(柳河東集卷一二)を附し、柳鎮が生前交遊を持った名士六十七人の姓名をとどめている。これらの人々にはおむね「最も能く文を為る」などの寸評が添えられているが、なかに齊映・楊憑・楊凝・楊凌・穆質・梁肅・韓会・韓愈・

許孟容・高郢・李益・柳登・柳冕らの名が認められ、韓・柳の青少年期における文学的環境が一層端的にのばれる。ちなみに、韓会は韓愈の長兄であり、両者の父韓仲卿の弟韓雲卿とともに李華の知遇を得たことは先に触れた通りである。父の風有りといわれた蕭穎士の子蕭存・梁肅・沈既濟・徐岱などとも交際があった。柳登・柳冕は柳宗元の族子であり、その父は柳芳である。柳芳が李華らとともに蕭穎士の善友であったことについても、すでに述べた通りである。また、韓・柳にやや先立つ柳冕が、古文を理論的にはほとんど構築しつくした人であることは記憶されるべきで、「全唐文」卷五二七に連なって収まる彼の文を論ずる書は圧巻である。

以上のような、蕭・李に始まつて韓・柳及びその門下に至る古文家集団が、すでに明らかのように、必ずしも実際的な方向を同じくはしないけれども、きわめて積極的な社会性を備えている点にも注意が怠れない。理論的な領袖であった蕭・李は、同時に真費な政治の行為者であった。その友人や門下の多くも、やがて執政の頭官となつた。あたかも安史の乱を経験するなかで、唐の社会は大きな変貌を遂げつづつあった。一旦崩壊した社会の立てなおしに必要な新しいものへの希求は熾烈であり、浮華を斥けて道を説く古文の理論はそういう社会に即応し、恐るべき速度で中唐に浸透していくのである。一般には乱後の最大変化の一つとして、いわゆる中産階級出身者が科举を経て中枢へ進出した事実が挙げられるが、乱の平定後各々五・十年して生まれ、かつその出身者である韓・柳が進士を取ることを企図して幼なく始動したと

き、政治の牽引者の多くがすでに古文運動の洗礼を受けた人たちであった。李華に推奨されたあの李綺、あるいは柳冕と深い関係にあつたことが認められるほか、そのあざなも古風となづける独孤及の子独孤郁に女を娶ませた權德興といった人々は、それぞれ数回にわたって貢挙のことを知しているのである。「陸宣公奏議」で知られる陸贊や呂溫の父である呂謂、さらに柳宗元の「先友記」に見える高郢などもその任にあつた。いずれも古文に深い理解を示した人たちであると解してよいであろう。この時代の風潮のもとに、いわば古文の正統に属する韓・柳が、自からの文学の上達完成を求めて奮励したのは当然であった。素質にめぐまれた彼等は集団に庇護されながら古文を大成したが、同時に社会性をも存分に發揮した。韓愈は曲折はあったものの高官の地位を維

持したし、柳宗元は途中挫折したものの、一時は国家を動かす政治の中枢にせまつた。この寒貧出身の彼らの活躍は、その後に大きな影響を与えていた。社会史上新興階級進出の象徴的な事件として有名な牛李の党争の一端の礎を築いたのである。同様な階級の出身である牛僧孺は、のちに閩派の李德裕と政界を二分した、牛僧孺のもとには宗室出身の李宗闵や李漢、皇甫湜などが加わって勢力があった。李漢・皇甫湜が韓愈の門人であることは、初めに述べた通りである。李漢に致っては韓愈はこれを愛重して女を娶わせているほどである。じつに唐代の古文運動は、文體の改革運動であると同時に、その集団的な活動と時代の要求とを背景に、社会変革の先駆をもなしたものと考えられる。